

世の中には、なくなったら困るのに、ふだんはありがたみを感じないものがある。

いちばんに思いつくのは空気だ。長年お世話になっている人生の「連れ合い」も、その部類かもしれない。空気のような存在という怒られるか。

連れ合いはさておき、空気はいくら使っても減らないよ。だが、大気中の酸素は石炭や石油の炭素と化合して、見えないところで二酸化炭素がじわじわと増えている。これが大規模な気候変動につながるのか。まだ実感できないが、21世紀人類の心配事となっている。

水はどうだろうか。空気と同様、自然界でもっともありふれた物質である。人間の体重の60%（赤ちゃんでは80%）は水だという。実は自然界でも、これだけ豊かに液体の水があるのは太陽系のなかで地球だけであり、だからこそ生命が芽生え、ここまで進化したわけだ。

はびこった人類が、湯水のごとく「使うものだから、さしもの「水惑星」も音を上げ始めた。世界的にやがて水は希少資源になりそうだという。この状況は、水に恵まれている日本では、まだ見えにくい。

時間も水もゆっくり流れていた



50年前には身の回りにあった水の風景が、いつのまにか影をひそめている。

行水。夏の夕暮れ時、たらいに張った水に入って汗を流す。木立に囲まれた庭先。「行水の女に惚れる鴉かな」(虚子)という句も生まれた。

打水。各戸がバケツにくんだ水をヒシャクで自分の家の前の道にまく。ホースでの放水とはちがった趣きがあった。手水鉢。お手洗いに置いてあった。何という装置だったか、



武部俊一 (科学ジャーナリスト)

見える水、見えない水

垂れ下がった先づばを押し上げると水がチョロチョロと漏れ出す仕掛けとセツトになっていることもあった。

水も時間もゆっくり流れていた。いまより水が少なかったのではなく、水を大量に使う装置が普及していなかったからだろう。いまでは勢いよく噴射するシャワーやお尻まで洗ってくれる装置が快適さをもたらしてくれるが、かえって水の姿が見えなくなったような気がする。

もっぱら目にするのがプラスチックのボトルに入ったミネラルウォーターの大群である。内外各地の「名水」のなかにはアラブの「砂漠の水」まである。水がガソリン並みの値段で売り買われる社会は、少しおかしいのではないか。

このような「見える水」とは別に、日本は世界から「見えない水」を大量に買い込んでいる。

牛肉1キロで水15トンを輸入

日本人は年間1人あたり1トンほどの水を飲み、炊事、洗濯、入浴、お手洗いなどの家庭用水を120トンほど使っている。

このほか国内での工業用水として1人あたり120トン、農業用水として500トンを使う。これだけでは食べていけないわけで、輸入した食糧を生産するために1人あたり海外の農業用水を800トンも使っている勘定になる。



(東大生産技術研究所・沖大幹教授らの推計)

1キロの精製小麦をつくるには3トンほどの水が必要で、トウモロコシでも1トンくらい要る。それが牛肉となると、餌にする穀物の分も含めて1キロつくるのに水15トンほど要る。200グラムのステーキを食べるとき、私たちは3トンの水を消費していることになる。

た。人口増加速度の倍の伸びだ。ダム建設や電動やディーゼルエンジンのポンプの導入で河川や地下の帯水層からどんどん汲み上げられるようになったからだろう。この結果、世界各地で大河が海まで達しなくなったり、湖が縮小したり、地下水位が低下したりする異変が頻発するようになった。

前世紀末、「21世紀には水戦争が起きる」(セラジェル・元世界銀行副総裁)という警鐘が鳴らされた。日本にいるとピンとこないが、世界の60%の人たちが、複数の国に沿った国際淡水流域に住んでいるときくと、脅かしとは思えない。

この10月に発表された国連環境計画の「第4次地球環境概況」によれば、2025年には18億人が極度に水不足の地域に住んでいることになり、世界の3分の2の人びとは日常生活に差しさわる「水ストレス」下に置かれると憂慮している。

国際社会も手をこまぬいてはいない。2002年、南アフリカのヨハネスブルグで開かれた環境開発サミットでの実施計画に「飲用水の利用が困難な人口を2015年までに半減する」という目標をたてた。国連は2003年を国際淡水年としたあと、2005年からは「命のための水」行動の10年計画を展開している。

20世紀を「石油の世紀」といつなら、21世紀は「水の世紀」ということになるのか。水は空気と同じく人類の共有財産と考えたい。希少資源となっても利権の対象には困る。石油と違って、水には代替物がない。



「水の世紀」が破局を迎えないように

地球は「水の惑星」だといっても、その水のほとんどは海水であり、陸上の生命が利用できる淡水は2.5%にすぎない。その淡水のうちでも氷河が69%、地下水が30%を占め、利用しやすい湖や川などの地表水は1%に満たない。水は太陽エネルギーで海から蒸発して補われ、雨や雪となって循環しながら生命を養ってきた。

ところが20世紀の100年間で世界の水需要は6倍にふえ



たけべしゅんいち:1938年、大阪市生まれ。1961年、東京大学教養学部教養学科(科学史・科学哲学)卒業。同年朝日新聞社に入り、社会部記者などを経て1969年から科学記者。1983~88年、科学部長。1988~99年、論説委員。1999~2000年、編集局顧問。2001年からフリージャーナリスト(日本科学技術ジャーナリスト会議会員)。科学・技術と社会との関わりに関心をもつ。興味の対象はモーツァルト、レオナルド、ゲーム、ET、ワイン。著書は『タイムマシン夢書房』『宇宙開発の50年』など。